



ルー
テル

藤が丘だより

発行 月報編集委員会

発行日 2019年1月6日

№. 56

事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、
試練を受けている人たらを助けることがおできになるのです。

へブライ人への手紙 2章18節



礼拝献花より

神と共に 人と共に

ルーター派キリスト教会 日本福音ルーテル藤が丘教会 牧師 佐藤和宏
〒227-0043 横浜市青葉区藤が丘 2-31-21 tel 045-973-2729/ fax 045-439-7009
URL:<https://www.jelc-fujigaoka.org/> mailto: fujigaoka@jelc.or.jp



シリーズ説教

『神のプレゼント』

牧師 佐藤和宏

ヨハネ1章1節〜14節

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」この箇所が、毎年のクリスマス礼拝で読まれるのは、クリスマスの出来事が、人の思いをはるかに超えた神の御心であることを知らせるためにほかなりません。聖書は次のように続いています。「万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。」「言によらずに成ったものは何一つなかった」と言われているのですから、私たちが当然「言によって成った」一人であるということになります。私たちは、自らの努力や能力によって「成る」と考えますし、またそれぞれの努力次第でその「成る」という結果も違ってくると考えることでしよう。しかし、聖書は「言によらずに成ったものは何一つなかった」と告げているのです。つまり、私たちが自ら「成った」と思ってきたことは、実はそう

ではなく、誤解に過ぎないというようになります。それはちょうど、「信仰義認」という理解を行っているかのようには誤解している様子に似ています。そうではなく、「万物は言によって成った」のですから、言によらなければ何一つ「成った」という結果は得られないと聖書は言っているのです。さらに言えば、「成った」という言葉の意味するところは、「完成した、その人により作られた、形作られた」ということになりますから、万物は言によって形作られ、完成したというのです。完成したというのですから、そこには不完全なものも失敗もありません。すべては言によって完全なものとなったのであり、それ以外ではないのです。

つまり私たちがすべてのものと共に「完成した」と、聖書は告げているのです。それは天地創造のはじめに、主なる神が造られたすべてのものと共に人をご覧になって、「それは極めて良かった」と見なされたことにも通じます。しかし私たちは自分を指して、「完成した」「完全と成った」とは思えませんし、それぞれの人生に失敗もないかと振り返ると、決して

てそのように思えないのです。この世に生きる限り、社会は私たちにさらなる努力を求めますし、「完成」を目指して日々、積み上げていかなければならない。そのように生きなければならぬ、と一種の強迫観念にとらわれてしまう私たちもいます。また、努力はしているのですが、失敗を繰り返してしまふ私たちもいるのです。人として「完成した」と言うにも、人生を振り返って「完成した」と言うにも、程遠いと思えてならないのです。どちらかと言えば、「ダメだ」「不完全だ」と自らを否定したくなるのです。今日、聖書が「万物は言によって成った」と言っているのは、私たちと無関係なことなのでしょうか。

そこで次のように考えてみてはどうかと思うのです。それは、クリスマスにお生まれになった幼子が、私たちに与えられた「神のプレゼント」であるということです。この「神のプレゼント」が、私たちの間に住まわれ、私たちの罪の赦しのため、すなわち救いのために十字架の死を遂げられたのですから、すべて救いはこの「神のプレゼント」によつての

みもたらされるのです。そして「神のプレゼント」なので、私たちはただそれを受け取るだけで求められません。このように「神のプレゼント」を受け取ることが「信仰」なのです。そこで中心となるのは「神のプレゼント」そのものであり、それを受け取る「信仰」のあり方、内容ではないのです。この「神のプレゼント」のゆえに救われるのであって、他の何ものでもないのです。これがルターの言う「信仰のみ」ということにちがいません。

この「神のプレゼント」は、私たちが期待するような華やかなものではなく、力に満ちたものでもありませんでした。ですから、誰の目にもぜひ受け取りたいと思えるものとは映らなかつたのです。しかし、この「神のプレゼント」こそ、私たちの弱さ、悩み、苦しみ、悲しみを誰よりも知り、共にいてすべてを担われる愛そのものなのです。ただその差し出された「神のプレゼント」を受け取ることで、私たちは救われる。これが「信仰義認」が示している真実であり、クリスマスに示される神の御心なのです。

(降誕祭)

■ホームカミングデイ

○田○子

11月25日(日)、藤が丘教会ホームカミングデイが開催され、江口先生ご夫妻を始め、8名の方が参加してくださいました。

礼拝説教は初代牧師江口再起先生によつてなされ、説教の中で藤が丘教会の35年に渡る歴史を話され、藤が丘方式の説明がありました。

藤が丘方式とは、①近隣の10の教会が力を合わせて新しい教会を造る。②自分たちがその資金を集める。外国からの支援に頼らず、日本の教会のみで自立して、自分たちの力で教会を建てる。③方式です。

これはとても素晴らしい事で我々は誇りを持って良いのだと、江口先生はおっしゃいました。

改めてこの藤が丘教会は多くの方々への援助と協力によつて建てられた事を思い知り、ありがとうございます。

説教の中で江口先生は「最初の鉄筋剥き出しプレハブの礼拝堂は、ベツレヘムの馬小



屋に似ている。客観的には、外見は貧しくみすぼらしい小屋だけれども、中ではなにかとても温かいものが感じられた」と話されました。本当にあの狭い外の車の音が入ってくるようなプレハブの建物は、飾らない素朴な良さがあつたことを懐かしく思い出します。説教全体を通して、江口先生の藤が丘教会への熱い思いが伝わって来ると共に、藤が丘教会の35年の歴史の重みを感じさせて頂きました。

懐かしい教会の仲間が顔を見せて下さり、嬉しい時でした。その中の何人かの言葉を紹介します。

◆教会で行う告別式が良いなあと思いい、導かれるように藤が丘教会に来ま

した。10年前に引越しし、今は富山にあります。藤が丘は18年振りで、とても懐かしいです。(○谷さん)

◆この教会が藤が丘方式で建つた時建設委員長でした。小グループに分かれて幾つかのルーテル教会を廻り、新しい礼拝堂を検討しました。(○瀬さん)

◆一番教義のハッキリとした教会を選ぼうと考えました。徳善先生の文章を読んで、ルーテル教会が良いと思いが集まっていると聞いて、この教会に来るようになりました。(○岡さん)

◆今、二俣川の夫の実家に居ます。子どもは小学1年生になりました。送られてくる週報を見ながら、懐かしく思っています。

(○さん)

現任教会員の方の幾つかの言葉を紹介します。

◆涙が出るような懐かしいプレハブを思い出しました。プレハブを馬小屋の様に感じられ



イエス様がそこに眠っている姿を想像させて頂きました。◆ここを建てるに当たって、近隣の方々の協力がありました。○内さんが新聞や瓶・缶等を集めて、教会の為に働いて下さったことをありがたく思います。◆この教会の歴史を聞いて、改めてここで良かったと思います。◆苦しい時・幸せでない時もありましたが、「今が幸せだなあ」と思うことが、神様の恵みなのだと思います。

来年もホームカミングデイが予定されています。懐かしい方々にお会い出来る事を楽しみに。

35年のあゆみ

あのと
このとき

1983年～1988年



①教会看板(83年) ②江口先生就任式(司式者古財牧師・83年) ③プレハブ会堂での礼拝(84年) ④元旦礼拝後?(85年) ⑤CS遠足(旧駅舎前・86年) ⑥特別伝道集会(徳善先生・87年) ⑦自治会館での礼拝(88年) ⑧建築のため更地になった土地で(写真中央は田〇〇子さん・88年) ⑨新会堂で(88年)

教会の動向



12月の教会は、1日に35年記念誌の作業をいたしました。翌2日(日)礼拝は、待降節第1主日として守られました。礼拝後には、定例役員会が開かれました。5日は聖研、7日は洗礼後の学びがありました。8日はクリスマスコンサートが開かれ、山路唯さんをお迎えし、美しい歌声と楽しいおしゃべりで時を過ごしました。

9日(日)礼拝後、宣教委員会が開かれ、教会の長期的見通し等について話し合われました。12日はお仕事会がありました。

女性会だより

日時：12月16日 礼拝後
参加者：14名
聖書の学び：ヨハネによる福音書 1章 1節、14節
「人間となった神」聖書が伝える恵みは神様からの無償の愛
その他：本年度会計報告 および次年度の予算について話し合った

お仕事会(12月12日)参加者 14名

16日(日)礼拝後、ホームカミングデイ委員会が開かれ、反省と今後への期待など意見が交わされました。また女性会がありました。19日には聖研、21日には洗礼後の学びがありました。

23日(日)はクリスマス礼拝と祝会がありました。24日(月)はクリスマススイブの礼拝がありました。

30日(日)は2018年最後の主日礼拝がありました。

昨年一年も教会のために、お祈りいただき、ありがとうございます。今年もよろしく願います。